

小学校における金管楽器出前授業報告Ⅰ[†]

高島 章悟*
宇都宮大学教育学部*

概要

筆者は石川県津幡町立英田小学校より授業依頼を受け、平成25年12月6日、特別授業として全校児童を対象とした音楽鑑賞、及び4年生、5年生、6年生を対象とした金管楽器の構造と演奏法についての授業を実施した。ここでは実際に行った授業の内容について報告する。

キーワード： 児童、鑑賞、楽器、構造、体験、演奏

1. はじめに

津幡町立英田小学校は平成元年4月1日、能瀬小学校、種小学校の閉校、統合により創立され、現在全校生徒255名（1年生47名、2年生31名、3年生34名、4年生50名、5年生42名、6年生51名）と津幡町内の小学校の中では中規模の学校である。その殆どの児童が生の演奏を聴く機会がなく、楽器も音楽の授業で使用されるものしか見たことがない。特にオーケストラで使用されている楽器に関して言えば、メディア、授業におけるCD或いはDVD等による鑑賞で視聴するという体験しかないのが現状であった。

今回、全校児童にチューバ独奏による演奏の鑑賞を、終了後4年生、5年生、6年生に金管楽器の仕組みと演奏法についての授業を実践した。依頼を受けた際、学校側から授業の目的、目標として以下のことが挙げられた。

- ① 児童に本物の楽器を見せ、演奏を体験させる
- ② 生の演奏を聴かせることにより、情操や表現力を養う（音楽の美しさ、楽しさを感じる体験をさせる）
- ③ ①②の体験により、児童が楽器や音楽に興味を持ち、意欲的に音楽の学習に取り組める

筆者はこれらの目的、目標に沿った授業を行わなければならないが、学校側は生演奏の鑑賞や楽器についての授業を受け入れることが初めてであった

ため、事前に電話やメール等による打ち合わせが念入りに行われた。その主な内容をここに挙げる。

Q1：学校側で準備することは何か。

A1：体育館は時期的に寒いと思われる。室温が低いと楽器が冷え、チューニング（音程調整）に影響するため、暖房の設置をお願いしたい。また、音響のチェックやピアノの蓋の開け具合、奏者の立ち位置を決めるため、30分程度のリハーサルをさせて頂きたい。余裕があればお伺いする前日を目処に、ピアノを調律し、442ヘルツに設定していただきたい。

Q2：児童の中では特別支援を必要とする生徒が5年生に2名、6年生に1名いる。授業中に落ちついていられない場合があるかもしれないが参加させても良いか。

A2：私としてはそれに関係なく受け入れたいと考えているが、先生が日頃ご指導されている中でのご判断にお任せする。

Q3：児童が鑑賞及び授業の際、どのように並ぶとよいか。

A3：全校の鑑賞は体育館、金管楽器の授業は音楽室で行われる。体育館では低学年（1、2年生）を中央に、中学年（3、4年生）を体育館入口側に、高学年（5、6年生）を体育館奥側に（図1）、音楽室では、6年生を窓側に、4年生を中央に、5年生を廊下側に座らせるよう（図2）。それぞれお願いしたい。さらに両会場とも、それぞれの学年或いはクラスの中で身長の高い児童から順に前から並ばせていただくよう重ねてお願いしたい。私とそれぞれの

[†] Shogo TAKASHIMA*:The Teaching Practice by Brass Instrument in Elementary School

* Faculty of Education, Utsunomiya University

楽器が、全ての児童の視界に入るようにするための配慮である。

図 1

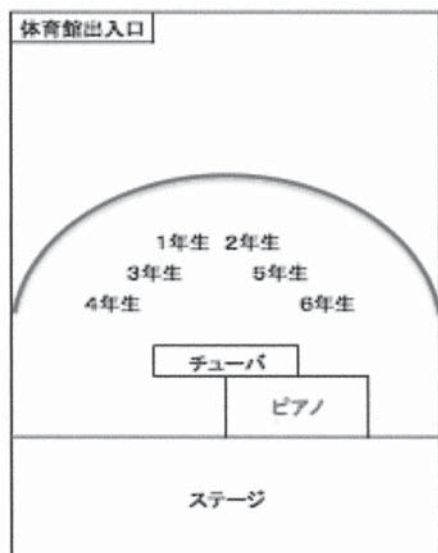
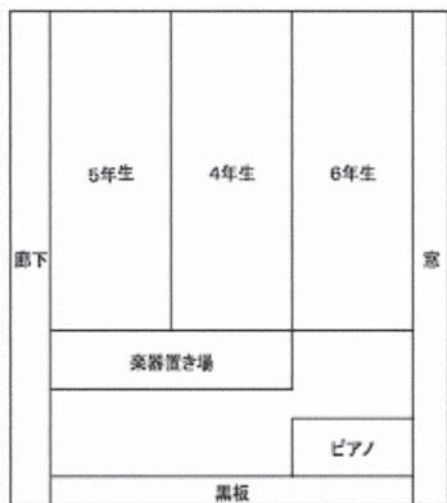


図 2



Q 4 : 楽器を体験させることは可能か。

A 4 : 私としては、授業の進行の中で特に重要な部分であると考えている。児童が体感することによって説明の裏付けとなり、納得し得る授業にしたい。但し、マウスピースが金属製であるため、金属アレルギーを持った児童がいる場合、楽器を吹くことに際し細心の注意が必要となる。児童のアレルギーの有無についての調査をお願いしたい。もし、該当する児童がいた場合、プ

ラスチック製の物を用意する。各楽器 2、3 個のマウスピースを用意するが、1 個を複数の児童が使用することとなるため、消毒用のウェットティッシュとアルコールを私の方で用意する。

その他、教室のレイアウトの詳細、持参困難な物品等に関する打ち合わせは、当日現地にて行うこととした。

2. 全校児童を対象とした音楽鑑賞

会場は学校の体育館、ピアノ伴奏に澤田加能子さんを迎え、曲の解説、楽器の紹介などを交えながら約 30 分間、チューバ独奏による音楽鑑賞を行った。曲目は以下の通りである。

1. カミーユ・サン＝サーンス：組曲「動物の謝肉祭」から 白鳥
2. エドワード・エルガー：愛のあいさつ
3. フリッツ・クライスラー：愛の喜び
4. 文部省唱歌／高野辰之作詞／岡野貞一作曲：もみじ

2-1. 選曲について

児童にとって学校で実際の演奏を鑑賞するのは初めてのことである。選曲にあたっては、筆者と授業担当の先生で話し合った。これまでの音楽の授業についての情報に基づき、授業等で聴いた経験のある曲、親しみやすい曲であることを考慮しながら、初めての音楽鑑賞に相応しいと思われる曲を選んだ。その内容は以下の通りである。

1. 白鳥

平成 23 年教育芸術社発行「小学生の音楽 4」に鑑賞教材として掲載されている。旋律や伴奏の音の動きやリズム、速さや強さなどに気をつけながら、曲の特徴を感じ取る授業を行っていた。

2. 愛のあいさつ

平成 14 年教育芸術社発行「小学生の音楽 4」に鑑賞教材として掲載、参考曲として同発行「小学生の音楽 5」の CD にも収録されており、児童に聴かせたところ、強く印象に残っていた曲。児童からのリクエストである。

3. 愛の喜び

参考曲として平成14年教育芸術社発行「小学生の音楽5」のCDに収録されている、同じく参考曲として収録されている、クライスラー作曲「愛の悲しみ」と併せて鑑賞し、悲しみと喜びの表現の特徴について聴き比べを行っていた。

4. もみじ

平成23年教育芸術社発行「小学生の音楽4」の歌唱教材として掲載。声の響き合いを感じて歌う授業を行っていた。チューバではどのように響き、また筆者がどのように表現するのかを聴いてみたいという、担当の先生からの要望であった。

2-2. 使用楽器について

今日主流とされているチューバは、主にバスチューバ（F管チューバ、写真1）とコントラバスチューバ（C管チューバ或いはB管チューバ、写真2）の2種類であるといえよう。そのうち今回はバスチューバを使用した。独奏であること、原曲がチェロ（白鳥）、ヴァイオリン（愛のあいさつ及び愛の喜び）、ヴォーカル（もみじ）とチューバの基本的な音域と比較して高音であり、それ故にチューバよりも音の輪郭が鮮明であることから、それらの特徴により近づけることが目的である。尚、写真は両方とも筆者の所有物である。

写真1

バスチューバ



写真2

コントラバスチューバ



2-3. 音楽鑑賞の実際

学校長の挨拶から始まり、音楽授業担当の先生から、筆者の経歴、鑑賞における注意事項の説明が行われた後、筆者とピアノ伴奏者が入場し、以下の進行で行われた。

白鳥演奏（約3分）

白鳥、愛のあいさつの曲目解説（約4分）

愛のあいさつ演奏（約3分）

チューバの楽器紹介（約10分）

愛の喜びの曲目解説（約2分）

愛の喜び演奏（約3分）

もみじの曲目解説（約2分）

もみじ演奏（約3分）

最後に、児童会会長と学校長の挨拶で締めくくられた。

3. 金管楽器の授業について

事前の打ち合わせでは、6時間目の45分を使い、以下のような時間配分で授業を行う予定であった。

1. 金管楽器の紹介(15分)

- ①トランペット ②ホルン
- ③トロンボーン ④チューバ

2. 金管楽器の音の出る仕組み(10分)

- ①唇の振動 ②マウスピースの説明

3. 楽器を実際に体験してみる(10分)

4. 児童が感想を発表する(10分)

当日の打ち合わせで、学校側より「多少時間が延びても構わないので一人でも多くの子供たちに楽器を体験させてあげたい」という要望が出された。話し合った結果、当初の予定を変更し、授業時間をさらに10分延長、楽器の体験に合計30分充てて終了とし、感想は後日児童に書かせたものを学校側でまとめて、筆者宛に送付することとなった。

3-1. 金管楽器の紹介

先に述べたように、児童の多くは生の演奏を聴く機会がなく、従って実物の楽器を間近で見る機会もないとのことである。筆者はまず、実際に楽器を見せながら、それぞれの楽器の構造についてクイズ形式で出題、児童が回答者となって挙手をし、答えを導き出すという方法をとった。ここで楽器別に実際に行った内容を述べる。

①トランペット

(1)長さはどのくらいでしょう？

児童は見た感じから想像して回答し、50センチから1

メートルと答えに差が出た。実際に伸ばした状態のものを見せることは不可能であったが、およそ「1メートル 50センチ」との解答には驚いていた。

(2) それでは重さはどうでしょうか？

これに関しては、なかなか想像がつきにくそうな様子であった。そこで筆者は、児童全員に実際に持たせてみてから答えてもらうこととした。その結果、殆どの児童が1～1.5キロの回答であった。今回使用したトランペットは1.17キロ。実際に持ってみたことでおおよその重さを想像できたのであろう。

(3) どのような音がするでしょう？

筆者が実際に、アンダーソン作曲：トランペット吹きの休日を演奏し音色を聴かせた。児童はトランペットの直線的な音に最初は驚いていたが、曲に意識が向くと、「運動会」、「かけっこ」など、以前に聴いたことがある場面を思い出していた。

②ホルン

(1) 楽器をよく見てください、管がぐるぐる巻かれています。長さはどのくらいでしょう？

児童からは4メートルから5メートルの間の回答が多かった。実際に使用したものはおよそ3.7メートル。それでも、その長さに驚いていた。

(2) 重さはどうでしょう？

トランペットを持ったことでイメージしやすいようであった。2キロから3キロの間の意見が殆どであった。実際は約2.5キロである。

(3) この楽器はどうして音の出るところが後ろを向いているのでしょうか？

この質問には、悩んでいる様子であった。そんな中、「トランペットのようにストレートな音にならないように(4年生女子)」や「トランペットが目立つように(6年生男子)」など、器楽合奏を構築していく上での理に適った意見も出てきた。そこで筆者は、「その昔、ヨーロッパで狩りの時に馬に乗って信号合図として使われていた。前に向けて大きな音を出してしまうと、馬は驚いて暴れてしまうからである」と説明すると、児童も先生も納得した様子であった。

(4) どのような音がするでしょう？

モーツァルト作曲：ホルン協奏曲第1番第1楽章を演奏した。その結果、児童からは「柔らかい音」、「包み込むような音」、「音の出るところが後ろに向いているからトランペットより遠くから聴こえるようだ」といった意見があった。

③トロンボーン

(1) トロンボーンはボタンのようなものを押して音を変えません。「スライド」という管を伸び縮みさせながら音を変えます。長さはどのくらいあるでしょう？

児童からの回答は4メートル、5メートル、6メートルと大きく差のある結果となった。実際は約2.7メートル。トランペットの2倍に近い長さであると説明すると、意外であったようで、「へええ〜」と、驚いた様子を見せていた。

(2) なぜトロンボーンには押すところがないのでしょうか？

質問が難しかったのか挙手がなかった。筆者は、トロンボーンの起源について、「元々トランペットが原点である。昔はトランペットも押すところがなく、今のトロンボーンと同じスライドであった。その後改良され、指で押して音を変えるピストンというシステムに変わり、現在のトランペットとなった。スライド式のトランペットがサクバット(写真3)という楽器に変わり、さらに改良を続け現在のトロンボーンとなった。トランペットとトロンボーンは、一つの楽器が二つの異なる進化を遂げて現在の形となった楽器であると説明した。児童は納得した様子であった。

写真3 サクバット



(3) スライドを使って音を出してみましょう。どのような音がするでしょう？

筆者はスライドを一番高い位置に設定し、小さな音量でレの音程を出した。徐々に音量を上げながら、最大になった瞬間、レの音程から低くなるようスライドを下げながら音量を落とした。目の前を走り過ぎるレーシングカーのエンジン音をイメージし、演奏したのである。

児童は、エンジン音という比較的身近な音を想像した為か、トロンボーンの音に親近感を持ったようであった。

④チューバ

(1) 金管楽器の中で一番低い音の出るチューバ、長さはどのくらいでしょう？

児童からは8メートルから20メートルまで幅広い回答が出た。実際はおよそ5.4メートル。それでも児童は驚いた様子であった。

(2) 重さはどのくらいでしょう？

これも5キロから15キロまで様々な回答が出た。実際に見せた楽器はおよそ10キロ。やはり驚いていた。

3-2. 金管楽器の音の出るしくみ

管楽器は「吹く」ことによって音が出る仕組みになっており、木管楽器、金管楽器共に音を出すために必要なのは「呼吸」であることを説明した。オーボエ、ファゴット、クラリネット、サクソフォンのような木管楽器は、楽器に息を吹き込むことで「リード」という薄く切った木の板を振動させて音を出すのに対して、金管楽器は唇を振動させて音を出すことを説明し、筆者が児童の前で息と唇だけで音を出して見せた。さらに、児童に実際に楽器を吹いてもらうことを想定し、唇の振動がより楽器に伝わりやすくなるように、「プー」と発音をするよう説明し、唇だけで振動するかどうか試してもらった。その結果、唇に固さがあるなどの個人差はあったものの、ほぼ全員振動していた。そのあと、金管楽器のそれぞれのマウスピースを提示し、小さいもの程、音が高くなり振動しにくく、大きいもの程、音が低く振動しやすいことを説明した。

3-3. 楽器を実際に体験してみる

児童に吹いてみたい楽器を選択してもらい、楽器を持つ前にマウスピースのみで唇が振動するかどうか吹いてもらった。トランペットとホルンを選んだ児童が振動しにくい状態であったため、筆者が「プー」の発音を使って息の速度を速くするようアドバイスした。その結果、一瞬ではあったが振動するようになった。次に楽器の正しい持ち方、構え方を説明し、筆者が支えながら実際に吹かせてみた。トロンボーンとチューバは指や腕が届きにくく苦労した場面もあったが、殆どの児童が音を出すことができた。ホルンとトランペットは思うように息の速度が上がらないため、唇が振動しにくく音を出すのが難しそうであった。

4. 児童の感想

後日、学校側より児童の感想文が送付された。その内容を要約すると以下のような感想であった。

鑑賞の感想

- ・チューバとピアノの重なりがとてもきれいだった。(14人)
- ・チューバの音に迫力がありびっくりした(6人)。
- ・力強いチューバと滑らかなピアノの音にはきれいな重なりがあり心が落ち着いていた(10人)。
- ・チューバは普段は縁の下の力持ちの役割だけど主役にしてもきれいな音だったので、主役にしてもいいのではと思った(2人)。
- ・チューバを演奏しているとき、たくさんの息を吸って演奏していてすごかった(3人)。
- ・ピアノとチューバの音色があんなに合うなんて思わなかった(4人)。
- ・チューバの音の高低と強弱に魅力を感じた(3人)。
- ・全ての曲が優しく、強弱がはっきりしていて、体が自然に揺れるような感じがした(2人)。

金管楽器の授業の感想

- ・金管楽器についていろいろな知識を増やすことができ、私もやってみたくて憧れた(8人)。
- ・私はピアノと、書写を習っているけど、先生の「好きだから頑張れる」という言葉を聞いて、「また頑張ろう」という気持ちになれた(3人)。
- ・教科書で見ると本物を見て、つくりがどうなっているのか詳しく分かり、勉強になった(4人)。
- ・ホルンを吹いてみたけど音が出なくて残念だった(2人)。
- ・ホルンのベルの向きが、狩りのため後ろの人に伝えること、また馬が驚かないように後ろに向いていることを知って驚いた(2人)。
- ・チューバは重たかったけど、自分の口で振動させて音が出たので嬉しかった(2人)。

4. まとめとして

チューバは低音楽器である。それ故に「輪郭がはっきりしない」といったような表現がよく聞かれる。また、たくさんの息を使う楽器でもあるため、しっかりと息の圧力で音を出す。従って出てくる音は、「迫力がある」などといった表現をされること

もしばしばである。ところが、演奏を聴いた児童から「きれいだった」、「滑らかであった」という感想があった。これは筆者にとって驚きであり、また大きな成果であった。

教育現場では、生の演奏を鑑賞する機会がまだ少ない。この状況を改善すべく、筆者は現場の先生とより情報を共有し、提供できるものを常に持っていないと考える。チューバ或いは低音楽器の音色的可能性を広げ、「迫力」だけではなく「美しさ」「優雅さ」「滑らかさ」、さらには「軽快さ」を聴き手に印象づける演奏を追求し続けたいと考えている。

金管楽器の授業においては、単に楽器の構造を説明するのではなく、筆者が児童に質問し、児童が考えて答えるという形式を取った。児童が自分で見て考えたこと、筆者と児童が対話しながら授業を行ったこと、さらに実際に楽器に触れ、演奏を体験したことで、児童は楽器に対する関心が高まり、音楽をより身近に感じる事ができたと思われる。児童らの感想文からもそれが窺える。

筆者は、児童から生まれた発想を受け止め、今後も教材研究を行っていかなければならない。そして教育現場と連携し、児童が音楽鑑賞や楽器の演奏を体験できる機会を設けられるよう発信し、実現させていきたい。

参考文献

- 1) 佐伯茂樹『楽器から見る吹奏楽の世界』, 河出書房新社, 2009年
- 2) 『ヴァイオリンのしらべ』, 山中美知子監修, リットーミュージック, 2008年
- 3) 菊池知也『チェロとピアノのためのポピュラー名曲集』, ドレミ楽譜出版社, 1999年
- 4) 松本祐士『学園愛唱歌選集』, ドレミ楽譜出版社, 2010年
- 5) 小原光一ほか『小学生の音楽3』, 教育芸術社, 2011年
- 6) 小原光一ほか『小学生の音楽4』, 教育芸術社, 2011年
- 7) 畑中良輔ほか『小学生の音楽3』, 教育芸術社, 2002年
- 8) 畑中良輔ほか『小学生の音楽4』, 教育芸術社, 2002年
- 9) 畑中良輔ほか『小学生の音楽5』, 教育芸術社, 2002年